

英語ワードペア表現の5つのタイプと意味変化

青 木 繁 博

Five Types of English Word Pairs and their Semantic Change

Shigehiro Aoki

0. はじめに

ワードペア（英語並列表現）は英語の歴史を通じてよく見られる表現であり、また現在も新たな表現が生み出され続けていることから生産性を保っているとも言える。andなどの接続詞によって結び付けられるという、形態としては簡素なものでありながら、文やテキスト中におけるその機能、役割などは多様であり、結果として得られる効果はときに大きなものとなる。ワードペアの意味は決して一様ではない。そしてしばし言われるような慣用表現や定型表現にとどまらず、その場で新奇な表現が作られるといった事例が多く観察される。このように多彩なワードペアの包括的な理解を目指し、それに向けた研究を進める中で¹、ワードペアの分類、特に意味に基づいたワードペアの記述と整理のためには、これまでの研究とは別の方向からのアプローチが必要であると考えに至った。本論文は、ワードペアの意味および意味変化を、認知言語学的観点に基づくモデル化（図式化）を通じて示すものである。こうしたモデル化を通じて、境界が曖昧であり、区分が動的に変化するという、まさに認知言語学的に捉えるほかはないワードペアの特質をより明らかにしたいと考える。

1. 本論文における研究ポイント

1.1. ワードペアを分類することに関して

ペアの要素である2語の意味関係やペアの形態によりワードペアを何通りかに分類することや、それぞれの種類のペアが特定のテキストやコーパスにおいてどの程度の割合を占めているかといった考察は、Koskeniemi (1968, 1975)、Gustaffson (1975)、Mollin (2014) などの先行研究で行われてきた。特にKoskeniemi (1968) と、その一部が修正されてKoskeniemi (1975) で示された以下の分類法は、これ以降の多くの研究の基盤となっている。

¹ 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 「一つの言語現象としてのワードペア：無意識的に用いられる英語並列表現の認知意味論」(平成25年度～平成27年度)

1. Synonymous or nearly-synonymous
2. Metonymic (associated by contiguity of meaning)
3. Complementary or antonymous²

しかし上記ワードペアの分類は、ワードペアの研究において有益なところがある反面、その区分があたかも固定されているかのように、確立されたもののように取られるおそれはなかっただろうか。ワードペアをはじめとする言語の諸表現に当然伴うであろう変化や、場合によっては元々有していたはずの動的な面をうまく捉えていない可能性があるのではないか。実際、時代やジャンルを問わず、ある程度まとまった数の英語ワードペア表現の例を収集して分類を進めていくと、多くの場面において既存の分類には収まらない事例を見ることになる。本研究では、そのような事例に対して、認知言語学的なモデルを用いた説明を試みたいと思う。

1. 2. ワードペアの分類を通じて問題となる点について

認知言語学的な観点からワードペアの意味の分類を考える場合、特に問題となる点は以下の2つの局面に関してである。

1. ワードペアの意味分類には曖昧なケースがあること。
2. ペアの中には分類を越えて意味変化するケースがあること。

上記2点に対して、それぞれ何らかの説明を与えることが本論文で目指すところである。まず前者については、これまでに収集した例やそれらに対して実施した研究に基づくワードペア分類（5分類）を提示する。これは先行研究における分類を否定するものではなく、この5分類の説明やモデル化をする中で、従前の分類にはうまく当てはまらない例もあった点や、これらの区分にはむしろ連続したところがあると捉えられる点などを論じる。また後者については、その5分類を踏まえた上で、通時的観点から、ある分類から別の分類へと変化していった事例などを具体的に挙げて考察する。

以下、オンラインのデータに基づく際は、概ね2015年7月1日から2016年2月12日までにアクセスした結果による。なお *OED Online* はこの間の2015年12月にアップデートを実施しているため、項目によっては記述内容等に異同が見られる可能性がある³。

2. ワードペアの5つのタイプ

先行研究に基づき、また諸テキストの考察を通じて得た知見から、本研究ではワードペアは以下の5通りに分類されると考える。分ける基準は「ワードペアの要素である2語の意味関係」である。

- i) ペアの構成要素である2語の意味が重なっている。（同意語からなるペア、「 $1 + 1 = 1$ 」）
- ii) 一方の語の意味がもう一方の語の意味を含んでいる。
- iii) 2語の意味が部分的に重なっている。

² Koskeniemi (1968) では“enumerative”（3項目以上）を含む4分類であった。

³ “Recent updates to the OED” <http://public.oed.com/the-oed-today/recent-updates-to-the-oed/>

- iv) 2語の意味が隣接している。(反意語や相補的なペア、一部は「 $1 + 1 = 2$ 」)
- v) 何らかの関連性を持つ2語が組み合わせられる。(それによって別のものを表す)

以降ではこれらを順にタイプ1からタイプ5と呼び、実例や主要な先行研究に言及しつつその性質を説明した上で、それぞれのモデルを提示する。

以下の図式化において使用する記号等の意味は以下の通りである⁴。

A、B：ペアの要素である語 F：焦点 R：ペアが示すもの
 実線：ある程度明確な境界 点線：曖昧な境界

《タイプ1》

まずタイプ1は同意語（シノニム）からなるペアにあてはまる図式である。2語は同意であるため、それらを足した意味もほぼ同一と考えられる。いわば「 $1 + 1 = 1$ 」である。

同意語からなるペアは、英語の歴史においては中英語期によく見られたものである。言語接触により、古英語以来の本来語とフランス語やラテン語から入ってきた語とが同意の関係となり、またそれらの語句を並列して表現することが行われるようになった。こうした同意語並列表現は、翻訳・訳読といった知的な場面である程度の役割を果たすことや（渡辺）、特に宗教的なテキストにおいては儀礼的に、祈りを捧げるかのように「重ねて」表現されたと考えられるなど、いくつかの面で有益な機能を果たしていたと考えられている。しかし別の観点からは、語源系統が異なるとはいえ、同じ意味を表す単語が重複して用いられることは、冗長な、不要な繰り返しであるといった印象を与えることも否定できない。

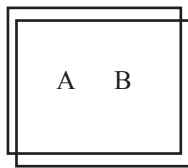


図1

Wilsonのように、これらの同意語並列表現の頻度の高さをもって、テキストの文学的評価を下げるものとみなす場合もある。

なお、ここでは作図の便宜上、要素Aと要素Bとをずらして書いているが、実際にはこれらの境界はほとんど重なっていると考えられる。

《タイプ2》

タイプ2では、ワードペアの要素である2語のうち一方の語の意味がもう一方の意味をも含むといった意味関係が見られる。具体的には、例えばdead and slain、high and holyなどは中英語テキストで実際に見られる例である⁵。これらのペアでは、前者がより広い文脈でも用いられる語であるのに対して、後者は特定の原因による死であったり宗教的な面での高度さといった意味で、前者と対応している。前者の意味範疇は後者をもカバーしているため、この場面に限るならば2語は「同じ意味」と言えなくもない。しかし当然、後者の使用文脈は限られており、これらの2語の同意性は非対称であると言える。

タイプ2のペアの機能としては、狭い意味の語を併せて使うことによって、広い意味を持つ語の意味を「限定する」といったことが挙げられる。広い意味の語は基本的な語彙である反面、場面によってはその「多義さ」ゆえに解釈が分かれてしまう可能性がある。特に、Gustafsson (1984) が考察した法律英語における同種の表現は、意味の厳密さを追求した結果であると考えられている。

⁴ 本論文では2語の語順は特に問題にしないこととする。また「F」および「R」は、必ずしも全ての図において示したわけではない。

⁵ これらのペアについては口頭発表（「Metonymy or Meronymy? 同意語的でないワードペアについての再考察」日本中世英語英文学会第31回全国大会、2015年12月6日）でも言及した。

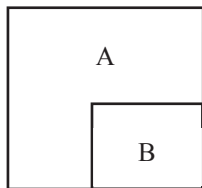


図2

《タイプ3》

タイプ2だけでなく、前述したタイプ1に関しても、2語の同意語が「まったく同じ意味」かどうかは意見が分かれるところであっただろう。しかしいずれにせよ、タイプ1とタイプ2に関しては、ペアの2語の間に意味の異同があったとしても着眼点はそこではなく、話し手は2語の間の「同一性」（あるいは類似性）に重点を置き、また聞き手もそれを受け入れることで成立する表現ではないだろうか。それに対して、タイプ3以降は、ある程度同一性や類似性に基づきつつも、その視点は「相違」へも向けられていると考えられる。

下の図には、2語の共通点を示す例と、それらの相違点を含めて総合的な意味を示す例とを併記した。図3-1から図3-2へ、このようなある種の「図と地の転換」が、やがてはペアの要素である2語の意味の「外」へと広がることにつながるのではないだろうか。

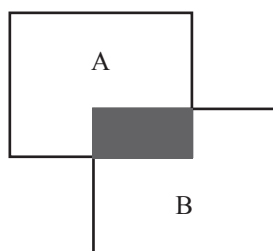


図3-1

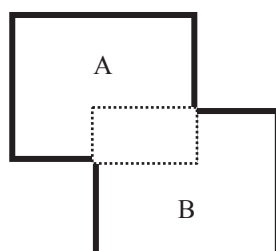


図3-2

《タイプ4》

タイプ4で中心となるのは反意語からなるペアである。反意性を持つ語の組み合わせは必ずしも無限ではないため、用例の種類という点では別のタイプが上回るであろうが、頻度としては下回ってはいない。ペアの要素である2語の意味関係の基盤を考慮することで、2語の意味の総和にとどまらないワードペアとしての意味特性の一端が示されると考えられる。

ワードペアに対する「素朴な解釈」の1つに、ワードペアの要素である2語の意味の総和が、ワードペア全体の意味である、といったものが挙げられる。つまり単純に「 $1 + 1 = 2$ 」ということで、その点ではわかりやすく、確かにそうした用例も存在しないわけではないだろう（図4-1）。しかし実際には、ペアの要素である2語の意味を足しても全体の意味にならない場合の方が多い。潜在的にその背景が含まれているケースや（図4-2）、「他にもある中であえてここだけを切り取った」あるいは「最も顕著なものや極端なものに焦点を当てた」といった例も想定される（図4-3）。もちろん反意語からなるペアの中にも、こういった点についてはいくつかの段階性が見られることになるであろう。

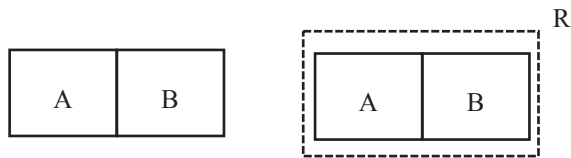


図4-1

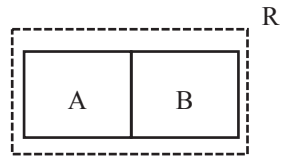


図4-2

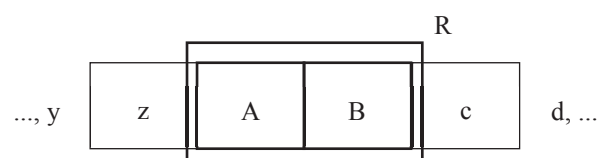


図4-3

《タイプ5》

ここには、タイプ4までには含まれない、何らかの意味の関連性を有する語からなるペアが含まれることになる。ここでいう意味の関連性には、2語の間にあるメタファー的あるいはメトニミー的な意味関係や、2語を対比するケースなど、複数の局面があると想定される。さらには一見関係がなさそうな2語からなる組み合わせであっても、社会の変化や発展に伴って新たな事物や概念、事態などが生じたときに表現として成立するといったことがあり得ると考えられる。

タイプ5をさらに下位区分していくかは今後の課題であるが、現状としては、組み合わせがある程度自由なペアをも範囲とすることから、このタイプには現代英語における多くのペア表現や、新奇なペア表現などが多く含まれることになる。また、上述のように将来的に生産されるであろうペア表現が含まれることになると思われる。

特にタイプ5のモデルには、要素A、B及びペア全体が示すものRに加え、焦点Fを導入することにメリットがあると考えられる。前述したようにワードペアでは要素と全体との乖離がしばしば見られるが、それはどこに焦点が当たっているか、言い換えればどこに「焦点が当たっていないか」によってある程度説明される可能性がある。下の図では便宜上、一例として焦点を要素Aに関連付けた図を示したが、もちろんBに焦点があたる場合もあれば、AとBとの間隙などに向かう例もあるだろう。あるいは焦点の大きさが変わることもあり得ると考えられ、2語の意味を越えていくケースもこれにより説明されるのではないだろうか。

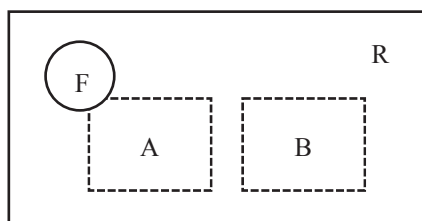


図5

3. ワードペアの変化について：通時的観点から

以下に例として挙げたペアには総じて意味変化が生じているが、ここまでに論じたワードペアの分類との関係を見た場合、変化の仕方は大きく分けて2通りある。タイプの中で収まる変化と、区分を越えて別のタイプのペアへと移行するケースである。なお、ここで例としたのは *OED Online* の見出し (Headword) に見られるもので、その中には過去の発表⁶で言及したペアが含まれる。

⁶ ポスター発表「*bread and butter* の意味消失：慣用的な英語並列表現が意味変化するプロセスについて」(日本認知言語学会第16回全国大会、2015年9月13日)

arts and crafts

これについては *OED Online* の *art, n.*¹ の項にコメントがあるので引用する。

Art originally shared many of its meanings with *craft* . . . ; however, by the 17th cent. the association of *art* with creative or imaginative skill . . . rather than technical ability tended to result in less semantic overlap between the two words. (*OED Online*, s.v. “*art, n.*”¹)

上に見られるように、ある年代までは *art* と *craft* は同意であるため、それら 2 語からなるペアもまた意味が重複したものだったと考えられる。その状況に変化が生じたのは、一方の語、この場合は *art* に生じた意味変化（おそらく意味拡張）である。2 語の意味が重なる部分は、なくなったわけではないが相対的に少なくなったと考えられ、これを前半で提示したタイプ及びモデルを用いて説明するならば「タイプ 1 からタイプ 2 へと移行した」と、以下の図6のように表すことができる。

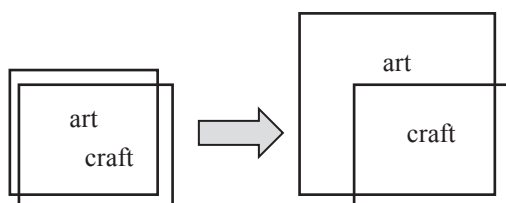


図6

fire and brimstone

このペアは2015年12月のアップデートにより *OED Online* の見出し (Headword) に追加された。

OED Online によると、brimstoneは硫黄 (sulphur) の古い名前で、今は宗教的な文脈などいくつかの場面に限って用いられるようである。初出はもちろんペアよりも早くa1300の *Cursor Mundi* だが、現代英語の例は20世紀以降のものは挙げられていない。ある種の古語になったというべきであろう。

ペアとしての *fire and brimstone* が表すのも、ニュアンスとしては宗教的で、「地獄の業火」といったものである。メタファー的な側面もあるこの用法については、ペアが初出する14世紀半ばから2000年代までの用例が挙げられている。さらに、そこから派生したものとして、17世紀はじめからは第二の意味が発展したと示されている。怒りや罵りなどの言葉として、あるいはそうした言葉を口にするといった意味で使われる用法である。こちらについては17世紀はじめから2000年代までの用例が挙げられている。

このように、単語 *brimstone* は別の語に取って代わられているのに対して、それが含まれるペア *fire and brimstone* は、新たな意味を獲得しつつ命脈を保っている (図7)。こうしたケースは、他の慣用的なワードペアのいくつかにも見られることがある。単独ではほとんど使われなくなった「廃語」が、ペアとしては頻繁に使われているといった場合があり得る。

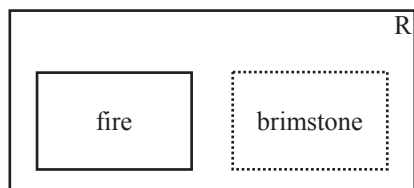


図7

free and easy

現在は「自由気ままな、のんきな」といった意味で使われることの多い当該ペアだが、*OED Online* には意味に変遷があった旨の説明が見られるため、まずはこれを引用する。

Originally: free from physical obstruction or hindrance; unrestricted. Later more usually: unconstrained, natural, unaffected; informal, relaxed, easy-going; (also with negative connotation) careless, slipshod; morally lax, permissive.

(*OED Online*, s.v. “free and easy, *adj.*, *adv.*, and *n.*, A. *adj.*” 下線は筆者。)

では単語としてのeasyやfreeはどうか。*OED Online* や *Historical Thesaurus* (Online) を参照してまとめると以下になる。初期古英語以来の語free「自由な」に対して、1200年頃に類義語として対応するようになったのがeasyである。これは同種の類義語が多々ある中でもかなり早い。その後easyは大体14世紀・15世紀辺りから「苦痛や不快から逃れていること、楽な、心地よい」の意味と、同じく14世紀辺りから「簡単な」の意味とを中心に用いられるようになったとのことである。

これら2語がもし1200年の時点でペアになっていたならば、それはタイプ1だったかもしれない（実際には、ペアとしての初出は1594年のため、それはなかったと考えられる）。上記引用に見られる「本来の意味」に関しては、freeとeasyとの間に意味の類似性が見出される（タイプ3）。これに対して「後のより一般的な意味」に関しては、類似性とまでは呼べないのではないか（タイプ5）。ただし、前者の意味もまだ完全に失われたわけではないため、当該ペアはこれら2つの図の間で揺れることになっているのではないだろうか（図8）。

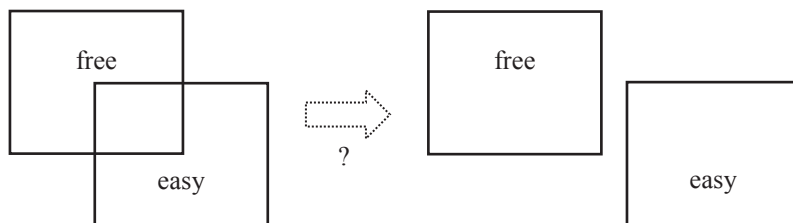


図8

milk-and-water

OED Online には当該ペアの異なる2つの意味が示されている。以下、意味説明の部分のみを抜粋して引用する。

† 1. The colour of milk and water; a bluish white colour. Freq. in extended use: a kind of cloth of this colour. *Obs.*

2. *fig.* Something feeble, insipid, or mawkish (esp. applied to discourse, thought, sentiment, etc.).

(*OED Online*, s.v. “milk-and-water, *n.* and *adj.*, A. *n.*” より、一部を抜粋。)

年代的に見て、これら2つの意味は連続しているわけではない。1は1511年から1573年までの用例が、2は1792年から1989年までの用例が挙げられているが、その間にあたる1600年代、1700年代の約200年のことは欠落している。

ここからは推測となるが、1 から 2 が直接派生したのではないとするならば、これらは同じ形ではあるが異なる観点を基盤とするのではないだろうか。ミルクと水にはいくつかの点で関連性があるが、それらを現実混ぜたものは複数の感覚に関わるイメージをも喚起すると考えられる。1 はその「色」に焦点を当てているが、2 はむしろ「味」や「風味」に焦点が当たっており、水を混ぜたミルクの味気無さを経てメタファー的に意味が形成されたと解釈できる。この点について示したのが下の図9となる。この例などはタイプを越えるものではないが、ワードペアにおける変化とワードペアの多義性との関係の一側面をより具体的に捉えたものと考えている。

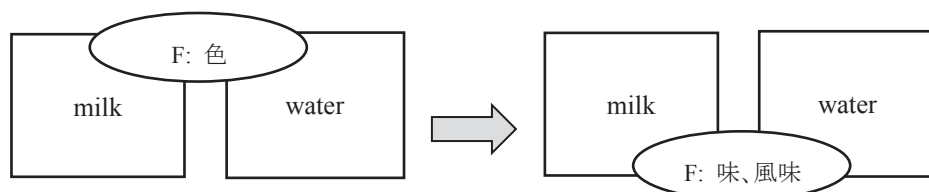


図9

4. むすび

本論文では、まず前半でワードペアの5つのタイプを提示した。ワードペア表現の多くはこれら5つのタイプのいずれかに属することになると考えられるが、用例によっては境界線上にあたるケースも存在すると考えられる。また後半では、ワードペア表現の意味が変化することや、場合によってはタイプを越えて変化していくことなどを論じた。そこで提示した例はあくまで一例ではあったが、その中には複数の形の意味変化が観察された。こうした考察から得られる結論は、一見したところ慣用的・定型的と思われるワードペアも、全体としては決して死語や廃れた表現などではなく、今も続く言語の「動き」の中に位置付けられるということではないだろうか。

謝辞：本研究はJSPS科研費25370451の助成を受けたものです。

参考・参考文献

- 青木繁博「中世英語散文の文体とペアワードーJulian of NorwichとMargery Kempe」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』37 (2007): 59-72.
- 一、「マージェリー・ケンプの旅とワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』41 (2011): 107-121.
- 一、「*The Cloud of Unknowing* における同意語以外の組み合わせによるワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』42 (2012): 99-107.
- 一、「英国王ジョージ6世のスピーチにおけるワードペアの劇的効果」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』43 (2013): 7-20.
- 一、「中英語散文におけるワードペアとメタファー：認知言語学的アプローチ」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』44 (2014): 1-8.
- 一、「特定の文学ジャンルにおける中英語ワードペアのヴァリエーション」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』45 (2015): 45-55.

- Cooper, William E., and John Robert Ross. "World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. Eds. Robin E. Grossman, L. James San, Timothy J. Vance. Chicago Linguistic Society, 1975. 63-111.
- Cruse, Alan. *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*. 3rd ed. Oxford Textbooks in Linguistics. Oxford University Press, 2011.
- Gustafsson, Marita. *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto, 1975.
- , "The Syntactic Features of Binomial Expressions in Legal English." *Text* 4 (1984): 123-141.
- 芳賀純、子安増生編『メタファーの心理学』誠信書房、1990.
- 早瀬尚子・堀田優子『認知文法の新展開：カテゴリー化と用法基盤モデル』英語学モノグラフシリーズ 19, 研究社, 2005.
- Katami, Akio. "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century." 『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 9 (2009): 177-189.
- Kay, Christian, et al., eds. *Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary*. Oxford University Press, 2009.
- Kikuchi, Kiyooki. "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* 42 (1995): 1-17. (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.)
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- , "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975. 212-218.
- , "Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology: Presented to Y. M. Biese on the Occasion of his Eightieth Birthday, 4.1.1983*. Eds. Iiro Kajanto, et al. Helsinki: Suomalainen Tiedekatemia, 1983. 77-84.
- Lakoff, George and Mark Johnson. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press, 1980. [『レトリックと人生』渡部昇一ほか訳, 大修館書店, 1986.]
- Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner, 1947.
- エルンスト・ライズィ『意味と構造』鈴木孝夫訳, 講談社学術文庫, 1994.
- Littlemore, Jeannette. *Metonymy*. Cambridge University Press, 2015.
- Malkiel, Yakov. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8 (1959): 113-160.
- 松本曜 (編著)『認知意味論』シリーズ認知言語学入門 第3巻, 大修館書店, 2003.
- 松本曜「英語反義語の認知意味論的考察」『神戸言語学論叢』5 (2007): 125-130.
- Meech, Sanford Brown and Hope Emily Allen, eds. *The Book of Margery Kempe*. EETS O.S. 212. London: Oxford UP, 1940.
- Miwa, Nobuharu and Su Dan Li. "On the Repetitive Word-Pairs in English—With Special Reference to W. Caxton—." 『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』58 (2003): 49-66.
- Mollin, Sandra. "Revisiting Binomial Order in English: Ordering Constraints and Reversibility." *English Language and Linguistics* 16.01 (2012): 81-103.
- , *The (Ir)reversibility of English Binomials: Corpus, Constraints, Developments*. Studies in Corpus Linguistics 64. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2014.
- 大堀壽夫『認知言語学』東京大学出版会, 2002.
- Ortony, Andrew, ed. *Metaphor and thought*. 2nd ed. Cambridge University Press, 1993.
- Reddy, Michael. "The Conduit Metaphor." *Metaphor and Thought*. 2nd ed. Ed. Andrew Ortony. Cambridge University Press, 1993. 164-201.
- 瀬戸賢一『メタファー思考：意味と認識のしくみ』講談社, 1995.

一.『認識のレトリック』海鳴社, 1997.

Shibata, Shozo. "Notes on the Vocabulary of The *Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 1958. 209-220.

Shimogasa, Tokuji. "Binomial Expressions in *Le Morte Arthur*." *Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3 (1997): 59-74.

Stone, Robert Karl. *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton, 1970.

須部宗生「語順固定の英語対句表現の一考察」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』1 (1999): 39-68.

谷明信「初期中英語the 'Wooing Group' のWord Pairsの用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊 (2003): 19-24.

一.「Chaucer の散文作品におけるワードペア使用」『ことばの響き—英語フィロロジ—と言語学—』今井光規・西村秀夫(編). 東京: 開文社, 2008. 89-116.

谷口一美『認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー』研究社, 2003.

Taylor, John R. *Linguistic Categorization*. 3rd ed. Oxford University Press, 2004.

辻幸夫(編)『新編 認知言語学キーワード事典』研究社, 2013.

渡辺秀樹「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140.6 (1994年9月号): 285-287.

Watson, Nicholas, and Jacqueline Jenkins, eds. *The Writings of Julian of Norwich: A Vision Showed to a Devout Woman and A Revelation of Love*. Penn State University Press, 2006.

Wilson, R. M. "Three Middle English Mystics." *Essays and Studies*. New Series 9 (1956): 87-112.

Windeatt, Barry A., ed. *The Book of Margery Kempe*. Cambridge: D. S. Brewer, 2004.

Yamaguchi, Hideo. "A Study of the *Book of Margery Kempe*." 『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号 (1971): 1-44.

山梨正明『比喩と理解』東京大学出版会、1988.

安井稔『言外の意味』(新版) 開拓社、2007.

英和辞書ソフトウェア

『CD-ROM版 ジーニアス英和大辞典』大修館書店、2002.

『CD-ROM版 ランダムハウス英語辞典 [第2版] Windows版』小学館、1998.

『EPWING版 リーダーズ+プラス V2』研究社、2000.

Online Resources

OED Online. <http://www.oed.com/>

TEAMS Middle English Texts. <http://d.lib.rochester.edu/teams>

The Book of Margery Kempe. Lynn Staley, ed. <http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/staley-the-book-of-margery-kempe>

The Cloud of Unknowing. Patrick J. Gallacher, ed. <http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/gallacher-the-cloud-of-unknowing>

The Scale of Perfection. Thomas H. Bestul, ed. <http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/bestul-hilton-scale-of-perfection>

The Shewings of Julian of Norwich. Georgia Ronan Crampton, ed. <http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/crampton-shewings-of-julian-norwich>